

ティーチング・ポートフォリオ

〈教育学〉を〈教育〉する立場として



2013年3月20日作成
第3稿

仁愛女子短期大学
幼児教育学科 増田翼

目次

1. はじめに
2. 教育者（保育者）養成に求められる何を担当しているのか（責任）
3. どのような教育者（保育者）養成を目指しているか（理念）
4. どのような手法で理念を具現化しようとしているか（方法）
5. 実際の学習成果はどのようなものか（成果）
6. これからどうしていききたいか（今後の目標）

・註

・添付資料

資料1：カリキュラム表、カリキュラムマップ、シラバス、授業スライド、授業資料

資料2：バドミントンサークル写真

資料3：カリキュラムワーキンググループ会議資料

資料4：ポートフォリオ型コメントシート

資料5：ポートフォリオ型小課題シート

資料6：授業マップ型プリント

資料7：ループリックによるレポート評価

資料8：教材研究と模擬保育（保育原理Ⅱ）

資料9：グループワーク資料

資料10：ビデオカンファレンス資料

資料11：模造紙交流

資料12：研究室写真

資料13：『私の読んだ一冊』（書評集）

資料14：学生のレポート

資料15：授業評価アンケート

資料16：同僚からのコメント

1. はじめに

本ティーチング・ポートフォリオ作成の目的は、仁愛女子短期大学幼児教育学科における私の教育活動を省察し、教育改善に役立てることにある。ただし、ここに書いたことの多くは、保育者養成という特殊な教育環境にのみならず、種々の分野・領域における多様な教育活動に共通して該当すると思われる。そうした点では、本稿を自分だけのものにせず、様々な人々に広く公開することにも意味があるかもしれない。

ところで、そもそも教育基本法第1条に書かれているように、教育は、一人の人間としての「人格の完成を目指」すとともに「国家及び社会の形成者」を「育成」という目的を有しているが、この相克する二つの目的の実現はそれほど容易ではない。改めて自分が作成したティーチング・ポートフォリオを眺めてみても、この二つの目的の実現に苦慮している痕跡が各所に窺える。もちろん突き詰めていけば、この二つの目的は矛盾するものではなく、両者が相互補完的に相照らしてこそ実現されるものなのであるが、実際の教育活動において、そこまでの境地に至ることは甚だ困難である。そのような困難に対して、どのような方法的改善を行ってきたかという軌跡も含めて、自らの教育活動全般をここに記しておきたい。

2. 教育者（保育者）養成に求められる何を担当しているのか（責任）

担当授業科目において

私の教育活動のなかで一番の中心となるものは、担当する授業内における学生への関わりである。現在担当する授業科目は、〈保育・教育の本質や目的〉に関する「教育原理」「保育原理Ⅰ」「保育原理Ⅱ」「教育職の研究」「教育社会学」に加えて、〈2年間における学修の振り返り〉および〈保育者として必要な知識・技能修得の確認〉を目的とする「保育・教職実践演習（幼稚園）」である¹⁾。また、2013年度からは上記科目のほかに「保育実習指導Ⅲ」を担当する（資料1）。

何よりも授業は、教育者（保育者）養成という目的に向けて計画的で直線的な教育活動が実施でき、またその教育活動の結果を学生の学習成果や学生からの授業評価などから可視的に確認することができるものである。大人数の学生たちに対して効率的・効果的な教育活動を行えることから、教育活動のなかでも最重要なものとして位置づけられる。特に、担当するいずれの科目も保育者養成における基幹科目であり、ここでは保育・教育に対する基本的姿勢の醸成と基礎的知識の理解が求められていることを忘れてはならない。

学科運営および課外活動において

学科運営では、幼児教育学科クラスアドバイザーとして、これまで〈2010 年度入学生Cクラス〉を担任したほか、現在は〈2012 年度入学生Cクラス〉を担任している。一クラスの人数はおよそ40名程度である。また、2013年度からは学年主任も兼任する。

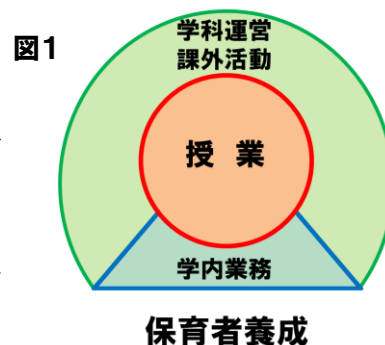
学内課外活動としては、「バドミントンサークル」および「ボードサークル」の顧問を務めている。特にバドミントンサークルは、毎年7月ごろ開催される北陸三県私立短期大学体育大会での優勝を目指し、毎週火曜日放課後に活動をしている（資料2）。これに加えて、2013年度からは「畑サークル」を立ち上げて、学生の環境教育体験の向上を目指す予定である。

これらの活動では、授業内では直接関わることが難しい様々な側面をカバーするとともに、主に学生理解に力を注いでいる。

学内業務において

短大全体の運営では、現在「教育課程委員会」に属しており、主に全学共通教養科目の検討やシラバスの点検・検討などを行っている。またその関係から「幼児教育学科カリキュラムワーキンググループ」を立ち上げており、幼児教育学科専門科目における Admission Policy、Curriculum Policy、Diploma Policy の検討を行っている（資料3）。2013年度からは、これに加えて「学生募集委員会」（高校生を対象とした学生募集活動全般）、「点検評価委員会」（第三者評価に向けた点検組織）にも属する予定である。

学内業務については、直接自らの教育活動と関係しないことも多いが、授業および学科運営・課外活動の円滑な進行を整えるものとして位置づけている（図1を参照）。



3. どのような教育者（保育者）養成を目指しているか（理念）

主な理念は、①現場が要求する保育者像への養成、②個性を活かすことのできる保育者への養成、という二つが挙げられる。

①国・現場が要求する保育者像への養成＝社会的要求に応じる

そもそも、保育士資格・幼稚園教諭免許ともに、その取得を目指すためには一定の基準を満たしている必要がある。そのため、資格・免許取得に関わる授業担当者としては、要求される一定の基礎的知識、基礎的理解、基礎的見方・枠組みを学生が習得できるよ

う教示的側面が強くなるのも当然である。また福井県の場合、幼稚園教諭を希望する者は6月ごろに実施される「私立幼稚園協会採用試験」の受験が、また公立保育士を希望する者は8月ごろから各市町村で実施される採用試験の受験が必須のため、こうした採用試験対策としても、担当授業科目内での知識伝達は非常に重要な教育活動となる。

加えて、保育現場が要求する理想の保育者像というものも、園によってある程度含みはありつつも、確実に存在している。たとえばそれは、挨拶・礼儀・明るさといった態度に関するものであったり、保育・教育に関する一定の見識、あるいは保護者や地域の人々との適切な関係構築力であったりする。そうした就職先に合わせる意味での、型にはめる教育が必要なことはいうまでもない。いわば、社会的要求に応じるかたちでの保育者養成であり、これは系統的、体系的な教育計画によって実施することが望ましい。

②経験を振り返り省察する保育者への養成＝個性の伸長

上では、社会的要求すなわち到達すべき姿を想定しての教育理念を記したが、他方で、一人ひとりの個性を踏まえたうえでの教育理念が求められることも忘れてはならない。

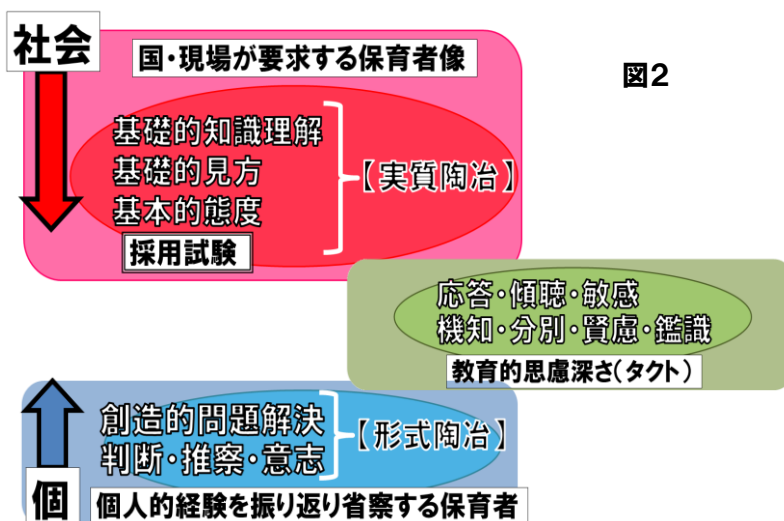
「先生」と呼ばれる職業は、社会の変化や発展に柔軟に対応することが求められる職種であるため、常に学び、常に自らを更新していく力が必要となる。こうした点を考えた場合、上述のように、単に型にはめる教育だけでは不十分だといえるだろう。つまり、型を踏襲しながらも型を破る教育、換言すれば、創造性の育成が求められるのである。学生たちは、卒業と同時に短大2年間で学んだ知識・技能を実際の保育実践のなかで活かしながら次世代の子どもたちに関わっていかなければならない。そこでは常に、自分の保育・教育を振り返り、よりよい実践へと高めていけるような反省的実践が要求される。そのためにも、様々な世界に触れ、視野を広げられるような教育活動を展開することも重要であるといえよう。

ところで、上記二つの理念の実現に向けて教育活動を行う際、一番考えなければならないことが、①社会的要求への応答と②個性の伸長という二つの相反するニーズを満たさなければならない学生一人ひとりの状況である。学生によっては、社会的要求には素直に従うだけの能力を有していながらも、一人の人間としての魅力(特技、得意なこと、興味・関心)に乏しい者がいる。あるいはまったく正反対に、種々のことに興味・関心が渡っており非常に活発的でありながら、社会的要求に合致しにくい(知識理解が足りない、基本的態度を示せない)学生もいる。さらには、そもそも保育・幼児教育という職業にそれほど期待を抱くこともないままに、「なんとなく」在籍している学生がいたりもする。こうした現状をおさえながらも、上記二つの理念を実現していくためには、①と②を取り結ぶ、より根本的な理念として、③教育的思慮深さを伴った実践者への養成、が必要となる。

③教育的思慮深さを伴った実践者への養成

改めていうまでもないが、保育・教育に関する理論は実践あつてのものであるから、理論を習得したからといって具体的状況における問題解決能力や判断、推察といったことが適切に働かなければ、ほとんど意味を成さないことになる。また反対に、非常に優れた状況対応力を持ち合わせていたとしても、それが理論に裏打ちされておらず、また実践を通じた理論の創出にもつながらないのだとすれば、こちらも保育者としての資質を大きく欠いているといわざるを得ない。

ところで、これら理論と実践の関係を適切に取り結ぶための中間項、すなわち教育的思慮深さ（タクト）が重要であることは、教育学の議論のなかでは再三再四唱えられてきた²⁾。なるほど私の教育活動においても、この教育的思慮深さを伴った実践者養成は目指されており、おそらくこの理念が根本に位置することで、上記①・②の理念が意味をもちはじめるのであろう（図2参照）。



さて、このように三つの理念について見てきたところで新たに浮上する問題が、この三つの異なる次元に及ぶ教育活動をどのように行ったり来たりしながら展開するか、ということである。三つの異なる次元については、以下のようにまとめておく。

- ①社会的要求に答えようとする際、理念・目的・目標・内容・方法・評価に関する教科書的な規範論（保育・教育はこうすべきだといわれています！）と事実論（現実の保育・教育はこのようになっています！）を伝えている次元
- ②個性の伸長を図るための支援、援助という次元（あなたの何が保育・教育に活かせるでしょうか？）
- ③教育的思慮深さに関する自分（増田）の価値観（保育・教育場面での感動・喜びを私はこう捉えています！）を示している次元

①はつまり、国の方針であり、現場の雰囲気であり、ある程度、この業界で働くために理解すべき規範および事実の教授である。また②は、一人ひとりに応じた適切な援助によって個性の伸長を図ろうとするものであって、あくまで活動主体は学生であるとい

うことを念頭に置きながら、その学生に対して「何が適切であるか」を見極めることが大切となる。そして、このなかで一番問題となるのが③である。それというのも、幼児教育学科における「教育学（保育学）」担当者＝〈教育学〉を〈教育〉する担当者として、自らの教育活動そのものが〈教育とは何か〉という価値観を意図せずとも示してしまう恐れがあるからである。したがって、極力、学生自身が構成主義的・自己省察型の世界観を築けるように援助し、容易に〈教育とは何か〉の答えを出さないように（様々な見方が存在することを理解するように）する必要がある。

4. どのような手法で理念を具現化しようとしているか（方法）

ここでは、前項で記述した三つの理念（①社会的要求への応答、②個性の伸長、③教育的思慮深さ）に従いながら、私の実施している教育方法の原則とその具体的内容ならびに教育方法に関するこれまでの改善過程を記しておきたい。

方法の原則

三つの理念を一度に満たすような方法は考えにくい。基本的には、いずれかの理念を具現化することにウェイトが置かれつつ、他の方法との併用によって三者補完的にバランスを保つよう心がけることが肝要である。

三つの理念のうち、特に①・②を、より具体的な方法として捉えやすくするために、以下のような二項対立として違いを考えておきたい。たとえば、それは〈集団〉と〈個〉であり、あるいは〈系統的教授〉と〈経験的学習〉であり、はたまた〈認知主義＝知識伝達〉と〈構成主義＝知識構成〉という二項に置き換えると分かりやすいであろう。

集団を相手とした、系統的で知識伝達型の教育活動において重要なのは、伝達すべき情報の提示の仕方（パッケージング）、学生にとって既知の概念と伝達すべき情報との関係性（比較）、保育実践との具体的関連性（応用）である。一方、一人ひとりの個に対する場合、求め得る適切な経験を引き出すために如何なる環境を構成すべきか、創発的に知識を構成していくために今必要とされていることは何か、といった先回りの学生理解が重要となる。

また、残る③の理念の実現を考えた場合、以下のような変化、成長を援助する教育活動を目指すことが好ましいように思われる。すなわち、〈受容型学習〉から〈自己決定型学習〉へ、あるいは〈正解（量）重視〉から〈パフォーマンス（質）重視〉へ、はたまた〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ、といった変化・成長である。ここで重視されるのは、意見表明であり、対話であり、何より変化・成長を自分の目と言葉で確認する作業過程である。

具体的内容

以上のような方法の原則を踏まえたうえで、私の教育活動ではどのような具体的方法を実施しているかを記すことにしたい（内容の詳細には、次項で触れる）。また三つの理念と方法の原則および具体的方法との関連性については図3にまとめておく。

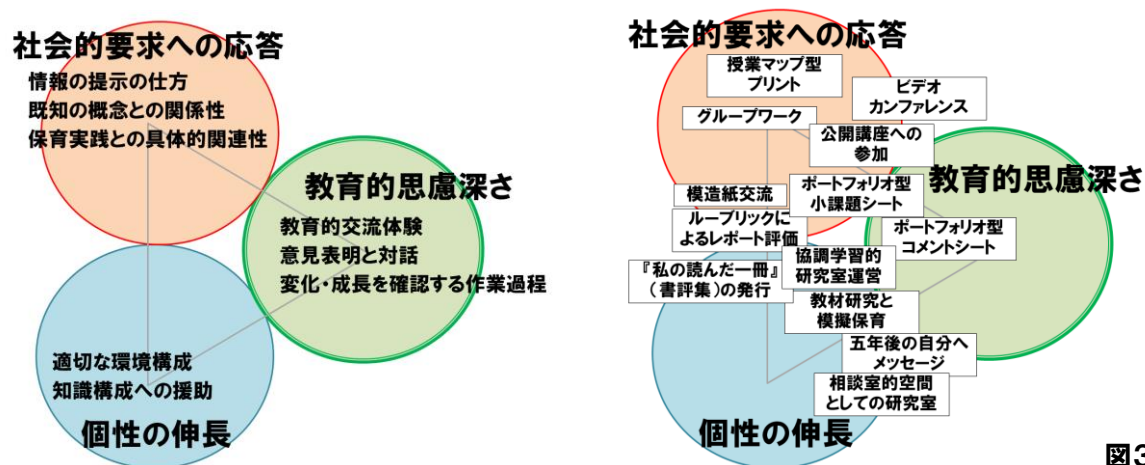


図3

【教育原理】【保育原理Ⅰ】【教育職の研究】【教育社会学】講義形式

- ・ポートフォリオ型コメントシート：教育原理・保育原理Ⅰ（資料4）
- ・ポートフォリオ型小課題シート：教育職の研究・教育社会学（資料5）
- ・授業マップ型プリント：教育社会学（資料6）
- ・ルーブリックによるレポート評価（資料7）

【保育原理Ⅱ】講義形式（一部は演習）

- ・公開講座への参加：現場保育者と同席
- ・教材研究と模擬保育：計画・実践・評価（資料8）
- ・五年後の自分へメッセージ

【保育・教職実践演習（幼稚園）】演習形式

- ・グループワーク（資料9）
- ・ビデオカンファレンス（資料10）
- ・模造紙交流（資料11）

【研究室運営】

- ・学生同士が主体的に学び合う場づくり：協同学習に向けた環境構成
- ・簡易な相談室的空間の確保：クラス運営、学科運営の円滑化
- ・「教育学」「保育学」関連の史・資料室（資料12）

改善の軌跡（改善過程・改善ポリシー・理念の具現化と教材との関連性）

以下には、これまで実際に行ってきた方法的改善について、改善前と改善後を示すことで、その過程を書き残しておきたいと思う。

【ポートフォリオ型コメントシート】（資料4）

（前）授業毎の感想文を書かせていた

→学生から教員への授業評価としては役立つが、学生自身の振り返りにはならない

（後）15回分のコメントがいつでも見渡せるシートを作成

→学生自身が自分の学びを振り返ることができるようにした

【ポートフォリオ型小課題シート】（資料5）

（一）授業毎の小課題を単に提出させてしまうのではなく、シートに貼っていくことで、15回分の自分の考えがいつでも見渡せるようにした

→学生自身が自分の学びを振り返ることができるようにした

【授業マップ型プリント】（資料6）

（前）「教育社会学」という科目は、教育的事実を理解するほかに、社会学的見方を理解することも求められる

→学生にとっては、非常に複雑で、難解な授業になってしまいがちだった

（後）単元ごとにA3一枚のマップ型プリントを用意した

→獲得型の基本的知識と考察型の社会問題とを区分し提示したことで、学生の思考の流れが幾分スムーズになり、「教育社会学」に対する理解度が増した

【ルーブリックによるレポート評価】（資料7）

（前）レポート評価の基準が漠然としていた

→印象による評価になってしまい、採点の根拠・妥当性に乏しかった（120名分読むなかで、最初に読むレポートと最後に読むレポートでは印象がかなり異なってしまう）

（後）レポート評価の観点・基準を示したルーブリックを作成

→観点毎にどの基準まで満たしているかをチェックすればよいので、採点の根拠・妥当性が向上した。また学生にもあらかじめ公表することで、何が求められているかを共有できた。

【教材研究と模擬保育（計画・実践・評価）】（資料8）

（前）短大の授業実態からすると、保育・教育に関する理念や内容、方法等についての概論、および学生自身のスキル獲得には多くの時間が割かれているが、〈子どもと

向き合った状態)での教材を通じた保育(援助・指導)の具体についてはあまり時間が割かれていない

→学生は、働き出してからどうしたらよいか、という不安を抱いている

(後)模擬保育の場を設定し、計画から実践・評価までの一連の「教材研究」を自主的に行うようにした

→学生たちは、保育において、ものごとの順序を組み立てる力(計画)、臨機応変に対応する力(実践)、振り返りながら次へとつなげていく力(評価)のそれぞれが求められることを具体的に理解できた

【ビデオカンファレンス】(資料10)

(前)短大の授業実態からすると、実際の保育者の言動を詳細に分析する授業が存在しない

→学生は、保育行為を漠然と理解するにとどまっていた

(後)子ども同士の喧嘩に保育者が介入する4分程度の映像を、何度も繰り返し視聴しながら、言葉の一つひとつや保育者の表情などを克明に分析した

→保育者の考えがどのように変わっていくかというストーリーや、保育者の言動の背景にある保育観・子ども観などを読み取ることができた

【『私の読んだ一冊』(書評集)の発行】(資料13)

(前)学生の読書量の少なさが、いつも話題にのぼっていた

→学生は、機会が設けられなければ読書しない(ただし、幼児教育学科は平日毎日ほぼ5時間授業という状態で、授業外に何冊もの課題図書を読ませるのは困難)

(後)「教育原理」(1回生前期)の課題の一つとして、好きな本を一冊読み書評を書く、というものを設定した(全員分の書評を一冊にまとめて学内に配布すると予告したうえで)

→学生によって選書のレベルには違いがあったが、単に読むだけでなく、それを評するという活動を通して、考えをまとめるなどの活動にもつながった

5. 実際の学習成果はどのようなものか(成果)

【ポートフォリオ型コメントシート】(資料4)すでに上述した

【ポートフォリオ型小課題シート】(資料5)すでに上述した

【学生のレポート】(資料14)各科目における提出レポート

- 【授業評価アンケート】(資料 15) 各科目における学生授業評価 (添付資料はFD委員会が集計したもの)
【同僚からのコメント】(資料 16) 公開授業週間に「教育社会学」を見学した同僚からのコメント

6. これからどうしていきたいか (今後の目標)

【短期目標】

まずは、授業全体の効率化を目指したい。特に、個々に目を配りながらも仕事量を減らす工夫を模索していきたい。具体的には、教材の吟味と整理を行い、現在散在している様々な教材をできる限り集約、集中化することで作業軽減を図っていきたい。このことは、今後ますます増加する短大内業務に対応するためにも必須の改善となろう。

他方、2013年度より、他校での非常勤講師業務が加わる。前期 15 回分の担当として福井大学医学部看護学科 (2013年4月～:「教育学」担当)へ、またスクーリング3日間の担当として佛教大学教育学部教育学科 (通信教育課程) (2013年6月・7月:「教育学演習」)に出講する。他校での教育経験は、おそらく新たな課題を生むであろうから、ぜひともそれらを今後の短大における教育活動にも反映させていきたい。

【長期目標】

喫緊の課題ではないが、将来的には、担当授業科目を中心に、より保育現場との連携を強めた教育活動を展開していきたいと考えている。実際の保育現場のなかに入り込み、そこから何かを学び取るような授業形態、あるいは反対に、短大の机上でおさえた知識・技術を保育現場で応用するような授業形態の確立を図っていきたい。

【註】

- 1) 2010年度、2011年度においては授業科目「卒業研究」も担当していた——2012年度から「卒業研究」は廃止に。各年度におけるゼミ学生の研究テーマは以下の通り。
【2010年度テーマ】「人形劇～大きなくまさん～」 「動物園へ行こう～さわれる大型絵本～」 「触れて学ぼう布絵本」。
【2011年度テーマ】「見て楽しむ! 触って楽しむ!! 遊んで楽しむ!!! 布すごろく!!!!」 「動物パラパラ」 「大きな仕掛けぶっく」 「布絵本 はらぺこあおむし」 「動かして遊ぶ布絵本—3びきのこぶた—」 「モンテッソーリ教育思想の研究」。
- 2) 徳永正直『教育的タクト論——実践的教育学の鍵概念——』(ナカニシヤ出版、2004年)を参照。あるいは、Johann Friedrich Herbart, *Sämtliche Werke*, Bd. 1. Hrsg. Von Karl Kehrbach u. Otto Flügel, Aalen 1964, S. 285. を参照。